ISSN 0385-9487

東洋學論叢

森 章司 教授退任記念号

「釈尊伝の研究」と私の仏教学
—退職するにあたって—　森　章司　(21)

「信心の業識」について　竹村　牧男　(35)

Vajra考(2)　—石とダイヤモンド—　渡辺　章悟　(92)

「現前サンガ」と「四方サンガ」　森　章司　(114)

『マツヤ・プラーナ』第183章：和訳と註解
『マツヤ・プラーナ』所収の「ヴァーラーナスィー・マーハートミヤ」について(2)　宮本　久義　(135)

『ゴーラクナート語録』研究—序　橋本　泰元　(159)

dharma文献における司法主題の名称とその内容
—svāmi-pāla-vivāda について—　沼田　一郎　(178)

『二入四行論』の作者について
—「曇林序」を中心に—　伊吹　敦　(185)

東洋大学文学部紀要第60集

インド哲学科篇

XXXII

森　章司 教授　近影

森　章司　教授　略歴・業績目録

略　歴

昭和一三年　八月　三重県四日市市に生まれる
昭和三二年　三月　三重県立四日市商業高等学校卒業
　　四月　日本碍子株式会社（現　日本ガイシ）入社
昭和三七年　三月　同社依願退職
　　四月　東洋大学文学部仏教学科入学
昭和四一年　三月　同学科卒業
　　四月　東洋大学大学院文学研究科仏教学専攻修士課程入学
昭和四三年　三月　同課程修了
　　四月　東洋大学大学院文学研究科仏教学専攻博士課程入学
昭和四六年　三月　同課程単位取得退学
　　四月　財団法人大倉精神文化研究所研究員（平成一四年三月まで。この間平成七年八月から九年三月まで研究部長）
昭和四七年　四月　東洋大学文学部助手
昭和五〇年　三月　同依願退職

四月　東洋大学文学部非常勤講師（昭和五二年三月まで）
昭和五二年　四月　東洋大学文学部専任講師
昭和五四年一二月　学生部副部長（昭和五五年一〇月まで）
昭和五五年　四月　同学部助教授
昭和五六年　一月　中央学術研究所講師（現在に至る）
昭和五七年　四月　財団法人庭野平和財団平和研究会研究員（現在に至る）
昭和六二年　四月　東洋大学文学部教授
昭和六三年　四月　文学部第二部印度哲学科主任（平成三年三月まで）
平成　三年　四月　文学部第一部印度哲学科主任（平成七年三月まで）
一二月　学校法人東洋大学理事（平成六年一一月まで）・評議員（平成九年一一月まで）
平成　七年一〇月　「原始仏教から阿毘達磨への仏教教理の研究」にて東洋大学大学院より博士（文学）
文学部第二部印度哲学科主任（平成一〇年三月まで）
平成一〇年　四月　国内特別研究員（平成一一年三月まで）
平成一一年　四月　大学院文学研究科仏教学専攻主任（平成一三年三月まで）
平成一二年　四月　文学部第一部印度哲学科主任（平成一三年三月まで）
平成一三年　四月　東洋大学文学部長（平成一四年一二月まで）
平成一六年　四月　東洋大学東洋学研究所長（平成一八年三月まで）
平成一八年　一月　北海道大学大学院・文学部非常勤講師（集中講義）

平成一九年　三月　東洋大学文学部依願退職

著書・編書

『異部宗義主題別分類対照表（昭和五二年度文部省科学研究費補助金による研究報告のための昭和五三年度刊行補助金による出版）』（東京プリント社　昭和五四年三月）八〇頁
『仏教比喩例話辞典』（東京堂出版　昭和六二年六月。国書刊行会　平成一七年六月復刊）六四三頁
『仏教思想の発見』（北辰堂　平成二年一月）二七二頁
『国語のなかの仏教語辞典』（東京堂出版　平成三年九月）三六一頁
『戒律の世界』（北辰堂　平成五年五月）九八九頁
『原始仏教から阿毘達磨への仏教教理の研究』（東京堂出版　平成七年三月）七〇三頁
『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究（一）』（中央学術研究所　平成一一年七月）二〇七頁
『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究（二）』（中央学術研究所　平成一二年七月）二三二頁
『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究（三）』（中央学術研究所　平成一二年九月）二三二頁
『初期仏教教団の運営理念と実際』（国書刊行会　平成一二年一二月）五〇九頁
『仏教的ものの見方―仏教の原点を探る』（国書刊行会　平成一三年一月）二一五頁
『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究（四）』（中央学術研究所　平成一三年一二月）二八九頁
『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究（五）』（中央学術研究所　平成一四年五月）二一四頁
『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究（六）』（中央学術研究所　平成一四年一〇月）二七二頁

『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究（七）』（中央学術研究所　平成一五年一〇月）一五五頁
『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究（八）』（中央学術研究所　平成一六年三月）五〇一頁
『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究（九）』（中央学術研究所　平成一六年五月）二一一頁
『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究（一〇）』（中央学術研究所　平成一七年四月）二六七頁
『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究（一一）』（中央学術研究所　平成一八年一〇月）一五〇頁

研究論文

「ニカーヤ・阿含における『無常・苦・無我教説』について」『印度学仏教学研究』第一九巻第二号（日本印度学仏教学会　昭和四六年三月）三三八～三四一頁
「原始仏教における無我説について」『印度学仏教学研究』第二〇巻第二号（日本印度学仏教学会　昭和四七年三月）三四六～三四九頁
「原始仏教における四諦説について」『大倉山論集』第一〇輯（大倉精神文化研究所　昭和四七年三月）二一五～二七六頁
「五取蘊について」『東洋学研究』第六号（東洋学研究所　昭和四七年三月）一〇七～一二四頁
「新・旧『婆沙論』の引用経について」『印度学仏教学研究』第二一巻第二号（日本印度学仏教学会　昭和四八年三月）三七四～三七九頁
「原始仏教における『無常・苦・無我』説について」『大倉山論集』第一一輯（大倉精神文化研究所　昭和四九年三月）一〇五～一五四頁

「原始仏教の『無常・苦・無我』説」『東洋学研究』第八号（東洋学研究所　昭和四九年三月）七五～九四頁
「浄土教思想と日本人の精神生活――善導と法然の対比を中心として」『大倉山論集』第一二輯（大倉精神文化研究所　昭和五〇年一二月）一三七～一五〇頁
「発智六足論における四諦説」『印度学仏教学研究』第二四巻第二号（日本印度学仏教学会　昭和五一年三月）五六～六〇頁
「有部阿毘達磨仏教における四諦説（一）」『三蔵』第一二一号（大東出版社　昭和五一年三月）一～八頁
「有部阿毘達磨仏教における四諦説（二）」『三蔵』第一二二号（大東出版社　昭和五一年八月）一～九頁
「有部阿毘達磨仏教における四諦説（三）」『三蔵』第一二三号（大東出版社　昭和五一年九月）一～九頁
「部派仏教の思想」『密教講座』第一巻第一二号（平河出版社　昭和五二年九月）一二四～一三一頁
「南方上座部の行道論」『東洋学論叢』第四号（東洋大学文学部　昭和五四年三月）七一～一二四頁
「部派仏教の修行道論」『日本仏教学会年報』第四五号（日本仏教学会　昭和五五年三月）一九～三七頁
「部派仏教における三乗の菩提と道」『宗教研究』第五四巻第三号（日本宗教学会　昭和五六年三月）二四七～二四九頁
「部派仏教における三乗と菩薩の思想」『菩薩思想（西義雄博士頌寿記念論集）』（大東出版社　昭和五六年五月）五一～七八頁
「仏典の比喩にみる自然――その一　天文気象」『大倉山論集』第四五輯（大倉精神文化研究所　昭和五六年一二月）五八～一〇七頁
「仏教における虚空の比喩」『中央学術研究所紀要』第一一号（中央学術研究所　昭和五七年四月）六四～八八頁

「仏典の比喩における仏陀観（一）」（『東洋学論叢』第七号（東洋大学文学部　昭和五七年三月）九五～一二七頁
「タイ仏教の宗教的活動」『東洋大学海外研究報告書（昭和五七年度）』（東洋大学昭和五七年一〇月）一四二～一五四頁
「日本文学における無常と仏教の無常」『東洋』第一九巻第一一号（東洋大学通信教育部　昭和五七年一一月）二～二一頁
「初期仏教における śānti と平和の理念」『平和と宗教』第一号（庭野平和財団　昭和五七年一一月）七～四四頁
「仏典の比喩における仏陀観（二）」『東洋学論叢』第八号（東洋大学文学部　昭和五八年三月）八三～一二〇頁
「『律蔵』における śānti ――その平和への理論（一）」『平和と宗教』第二号（庭野平和財団　昭和五八年一二月）五～二九頁
「仏典の比喩における仏陀観（三）」『東洋学研究』第一七号（東洋学研究所　昭和五八年三月）二九～三八頁
「仏典の比喩における仏陀観（四）」『東洋学論叢』第八号（東洋大学文学部　昭和五九年三月）一一一～一五二頁
「縁起の滅について」『仏教研究』第一四号（国際仏教徒協会　昭和五九年一二月）一～二五頁
「『律蔵』における śānti ――その平和への理論（二）《平等の問題》」『平和と宗教』第三号（庭野平和財団　昭和五九年一二月）五～四九頁
「妙好人の出現――その社会的・宗教的背景――」『江戸時代に於ける民衆を基盤とする諸学の研究』（東洋大学特別研究報告書　昭和六〇年一〇月）一九六～二〇九頁
「『僧尼令』と仏教の戒律（一）」『大倉山論集』第一九輯（大倉精神文化研究所　昭和六一年三月）一六五～一八六頁

「仏教の比喩表現における菩薩観」『日本仏教学会年報』第五一号（日本仏教学会　昭和六一年三月）二九～四八頁
「異安心の発生――その社会的・宗教的背景――」『江戸期に於ける庶民宗教と実学の系譜』（東洋大学特別研究・研究報告書　昭和六一年一〇月）八三～一〇二頁
「清沢満之の精神主義と国民道徳」『国民道徳論をめぐる諸思想の研究』（東洋大学特別研究概要報告書　昭和六二年九月）一七七～一八五頁
「『日本書紀』仏教記事を仏教の戒律で読む」『大倉山論集』第二二輯（大倉精神文化研究所　昭和六二年一二月）四九頁～八〇頁
「業思想の再検討――生命倫理確立のために」『淳心学報』第六号（現代人文科学研究所　昭和六三年二月）五一～七二頁
「原始仏教経典の編集形態について――大乗仏教の九分・十二分教観」『東洋学論叢』第一三号（東洋大学文学部　昭和六三年三月）六五～八六頁
「井上円了と真宗大谷派教団」『東洋学研究』第二二号（東洋学研究所　昭和六三年三月）二三～四四頁
「菩薩戒と大乗仏教教団」『大乗菩薩の世界（金岡秀友博士還暦記念論文集）』（佼成出版社　昭和六三年七月）二五～四五頁
「江戸時代における真宗教団（上）――『妙好人伝』の形成をめぐって」『大倉山論集』第二四輯（大倉精神文化研究所　昭和六三年一二月）一二七～一四四頁
「原始仏教における真実と人間観（上）」『平和と宗教』第七号（庭野平和財団　昭和六三年一二月）五～三七頁
「『日本書紀』にみる僧尼の戒律」『綜合研究飛鳥文化』（国書刊行会　平成一年二月）四二七～四六四頁

「井上円了の国語国字観―『漢字不可廃論』をめぐって」『井上円了の学理思想』（東洋大学井上円了記念学術振興基金運営委員会　平成一年三月）三六一～四〇四頁
「原始仏教における真実と人間観（下）」『平和と宗教』第八号（庭野平和財団　平成一年七月）五～三〇頁
「原始仏教における縁起説について―その資料整理」『中央学術研究所紀要』第一八号（中央学術研究所　平成一年一二月）一～三四頁
「江戸時代における真宗教団（下）―異安心の発生をめぐって」『大倉山論集』第二六輯（大倉精神文化研究所　平成一年一二月）七七～一一〇頁
「『井上円了選集』第四巻　解説」（東洋大学　平成二年三月）五三七～五六〇頁
「『諸行無常』と『諸法無我』」『東洋学論叢』第一五号（東洋大学文学部　平成二年三月）一～三九頁
「『諸行無常』と『諸法無我』の形成過程」『宗教研究』第二八三号（日本宗教学会　平成二年三月）一三〇～一三二
「『無常』『無我』の日本的受容」『東洋学術研究』第二九巻第四号（東洋哲学研究所　平成二年一二月）八四～九七頁
『講座　仏教の受容と変容　インド篇』第三章　出家社会とインド社会（佼成出版社　平成三年一月）一三三～一七六頁
「『歎異抄』における親鸞と唯円」『大倉山論集』第二九輯（大倉精神文化研究所　平成三年三月）四三～七七頁
「仏典の比喩に見る自然観」『真理と創造』第三二号（佼成出版社　平成三年一二月）五八～六五頁
「異安心・能登頓成事件の顛末」『大倉山論集』第三一輯（大倉精神文化研究所　平成四年三月）三九～六二頁

「縁起の滅と悟りの縁起」『東洋学研究』第二七号（東洋学研究所　平成四年三月）一一～二七頁
「宗教と経済――宗教経済学の可能性」『平和と宗教』第一一号（庭野平和財団　平成四年八月）七五～八六頁
「『律蔵』の諸特性とインド文化」『アジアにおける宗教と文化』（国書刊行会　平成六年三月）四七七～五〇四頁
「仏教の聖典観」『日本ボナベントゥラ研究所紀要』一九九四年度号（日本ボナベントゥラ研究所　平成六年）一～一四頁
「縁起と縁起説（上）」『東洋学論叢』第二〇号（東洋大学文学部　平成七年三月）一七～三九頁
「僧伽運営の理念――滅諍法をめぐって」『仏教学』第三七号（仏教思想学会　平成七年一二月）一～一八頁
「『破僧』考」『大倉山論集』第三八輯（大倉精神文化研究所　平成七年一二月）一～三九頁
「縁起と縁起説（下）」『東洋学論叢』第二一号（東洋大学文学部　平成八年三月）一三～三〇頁
「近世における真宗教団――異安心と妙好人――」『近世の精神生活』（続群書類従刊行会　平成八年三月）四二〇～四六五頁
「『律蔵』における破僧と部派分裂」『宗教研究』第三〇七号（日本宗教学会　平成八年三月）一五七～一五八頁
「仏教における女性の問題――律蔵を資料として」『平和と宗教』第一五号（庭野平和財団　平成八年一一月）一七～三一頁
「『律蔵』の中の異部派比丘」『大倉山論集』第四〇輯（大倉精神文化研究所　平成八年一二月）四九～七二頁
「『法顕伝』などインド旅行記にみられる部派と戒律」『東洋学論叢』第二二号（東洋大学文学部　平成九年三月）五〇～八一頁
「原始仏教経典における ksama（懺悔）について」『東洋学論叢』第二三号（東洋大学文学部　平成一〇年三月）

六六～一〇三頁
「『法顕伝』などインド旅行記にみられる異部派比丘」『大倉山論集』第四二輯（大倉精神文化研究所　平成一〇年三月）一～三六頁
「原始仏教経典における懺悔—pratikaroti」『中央学術研究所紀要』第二七号（中央学術研究所　平成一〇年一二月）二～三一頁
「仏教における『経』と『律』の葛藤」『平和と宗教』第一七号（庭野平和財団　平成一〇年一二月）一六～二六頁
「『律蔵』における罪と懺悔—原始仏教における āpattipratidesanā」『大倉山論集』第四三輯（大倉精神文化研究所　平成一一年三月）三七～九八頁
「人とものの共生」『仏教を中心とした共生の原理の総合的研究』（平成八年～一〇年度科学研究費補助金・基盤研究A　研究成果報告書　平成一一年三月）一一三～一二八頁
「『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究』の目的と方法論」『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究（一）』（中央学術研究所　平成一一年七月）一～八三頁
「原始仏教時代の暦法について」『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究（一）』（中央学術研究所　平成一一年七月）八四～一〇二頁
「釈尊の出家・成道・入滅年齢と誕生・出家・成道・入滅の月・日」『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究（一）』（中央学術研究所　平成一一年七月）一〇三～一四七頁
「在家阿羅漢について」『東洋学論叢』第二六号（東洋大学文学部　平成一三年三月）四九～七〇頁
「科学と仏教」『東洋学術研究』第四〇巻第一号（東洋哲学研究所　平成一三年五月）六三～八〇頁（Science and

Buddhism *The Journal of Oriental Studies* vol.12 The Institute of Oriental Philosophy Dec.,2002　pp.65~79)
「人は自らの意思でこの世に生まれてくる—初期仏教の立場から—」『平和と宗教』第二〇号（庭野平和財団　平成一三年一二月）四～一九頁
「由旬（*yojana*）の再検討」（本澤綱夫と共著　一番目）『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究（六）』（中央学術研究所　平成一四年一〇月）一～五一頁
「書簡に見る親鸞と慈信房善鸞」『東洋学論叢』第二八号（東洋大学文学部　平成一五年三月）二七～七三頁
「プロジェクト『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究』中間報告」『藝林』五二巻第一号（藝林会　平成一五年四月）一三三～一五〇頁
「原始仏教聖典におけるバラモン修行者—jaṭila（螺髻梵志）と vānaprastha（林住者）」『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究（七）』（中央学術研究所　平成一五年一一月）一～一一七頁
「摩訶迦葉（Mahākassapa）の研究」（本澤綱夫と共著　一番目）『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究（九）』（中央学術研究所　平成一六年五月）一～一四〇頁
「釈尊のめざされたもの—原始仏教聖典をとおして—」『平和と宗教』第二三号（庭野平和財団　平成一六年一二月）五～二一頁（Shakyamuni's Aim, as Revealed by Early Buddhist Scriptures *Dharma* World vol.32 Kosei Publishing co. Sept/oct. 2005 pp.9-16）
「死後・輪廻はあるか—「無記」「十二縁起」「無我」の再考—」『東洋学論叢』第三〇号（東洋大学文学部　平成一七年三月）一～二三頁
「*Mahāpajāpatī Gotamī* の生涯と比丘尼サンガの形成」（本澤綱夫と共著　一番目）『原始仏教聖典資料による釈尊伝

の研究（一〇）』（中央学術研究所　平成一七年四月）一～七〇頁
「ブッダゴータマとそのサンガ（教団）」『増谷文雄名著選』解説（佼成出版社　平成一八年二月）六〇三～六二九頁
「提婆達多（*Devadatta*）の研究」（本澤綱夫と共著　一番目）『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究（一一）』（中央学術研究所　平成一八年一〇月）一～一一四頁
「コーサラ国波斯匿王と仏教――その仏教帰信年を中心に」『印度哲学仏教学』第二一号（北海道印度哲学仏教学会　平成一八年一〇月）一～三三頁
「サンガのなかの釈尊と弟子――人材育成の理念と特徴――」『人間と科学』第一四号（中央学術研究所　平成一九年三月刊行予定）
「釈尊のサンガは存在したか――『現前サンガと四方サンガ』序説」（『智山学報』第五六輯（智山勧学会　平成一九年三月刊行予定）
「『現前サンガ』と『四方サンガ』」『東洋学論叢』第三二号（東洋大学文学部　平成一九年三月刊行予定）

訳註書

『国訳一切経　毘曇部八』（大東出版社　昭和五〇年八月）改訂版補注
『国訳一切経　毘曇部九』（大東出版社　昭和五三年八月）改訂版補注
『国訳一切経　毘曇部一〇』（大東出版社　昭和五三年一〇月）改訂版補注
『新国訳大蔵経　長阿含経一』（大蔵出版社　平成五年八月）九～五八頁（解説）、一五〇～二二九頁

その他

「禅の自然観と室町文化」『かいびゃく』（一円融合会　昭和三八年二月）二一～二八頁
「諸悪莫作のはなし（Dhammapada-aṭṭhakathā 和訳）」『大法輪』第四六巻第一〇号（大法輪閣　昭和五四年一〇月）一二八～一三四頁
「座談会　東インドの仏跡を探る」（金岡秀友・清水乞・沖守宏氏と）『真理と創造』第二一・二二号（佼成出版社　昭和五八年一二月）一六二～一九八頁
「人は母親の胎内に生まれる」『チャンダナ』第一四巻第六号（中央学術研究所　昭和五八年一二月）二～三頁
「学祖井上円了と真宗大谷派教団」『東洋大学報』第六八号（東洋大学　昭和五九年一月）三～四頁
「初期仏教における生老病死」『真理と創造』第二六号（佼成出版社　昭和六一年一二月）一六～二四頁
「一本のウイスキー」『こころ』第六号（邑心文庫　昭和六三年四月）二三頁
「図書館員でもあった私」『コスモス』（東洋大学付属図書館　昭和六三年七月）五頁
「ヒトとしての生命」『整形・災害外科』第三二巻第五号（平成一年五月）六九〇頁
「妙好人の生活――仏教の篤信者」『月例講話集』第二集（大倉精神文化研究所　平成二年三月）五〇～六四頁
「花は紅　柳は緑――仏教における真実と智慧」『月例講話集』第三集（大倉精神文化研究所　平成二年一二月）三〇～三六頁
「仏の心とは何か」『大法輪』第五七巻第六号（大法輪閣　平成二年六月）一三二～一三七頁
「『法華経』Q&A」『躍進』一九九一年三月号～一二月号（佼成出版社　平成三年二月～一二月）

「座談会　東洋思想の復活」（秋月龍珉・金岡秀友氏と）『フィロス東洋』第六号（東洋大学　平成三年）二～八頁
「目はヨコに鼻はタテについている」『サティア』第三号（東洋大学井上円了学術センター　平成三年七月）一〇～一二頁
「誤解されている仏教語」『大法輪』第五八巻第一二号（大法輪閣　平成三年一二月）一五六～一五九頁
「方丈記――無常ということ」『月例講話集』第六輯（大倉精神文化研究所　平成四年三月）三四～五八頁
「仏弟子をめぐる謎②」『大法輪』第五九巻第一一号（大法輪閣　平成四年一一月）一三二～一三六頁
「教育課程を考える――学長諮問委員会での議論を通じて」『フィロス東洋』第七号（東洋大学　平成四年一二月）
「仏教学と仏教の間」『淳心学報』第一〇号（現代人文科学研究所　平成五年九月）七六～七七頁
「ジャータカ」『まんだら』第八号（平成五年九月）三二～三三頁
「曼珠沙華」『円覚』第二二三号（円覚寺派宗務本庁　平成五年九月）七～九頁
「『戒』と『律』の葛藤――戒律を現代に問う――」『真理と創造』第三四号（佼成出版社　平成五年一二月）一一八～一二七頁
「歎異抄――親鸞の声・唯円の声――」『月例講話集』第一〇輯（大倉精神文化研究所　平成六年三月）一三四～一五二頁
「近世仏教における正統と異端」『大倉山夏季公開講座Ⅲ』（大倉精神文化研究所　平成六年三月）一〇二～一一八頁
「阿含経典」『大法輪』第六二巻第五号（大法輪閣　平成七年五月）一〇五～一一〇頁
「無戒無律時代」『チャンダナ』第一六五号（中央学術研究所　平成八年六月）二～三頁

「井上円了――お化け博士の正体――」『月例講話集』第一五輯（大倉精神文化研究所　平成八年一〇月）一一四～一四九頁
「『やさしさ』症候群」『チャンダナ』第一七五号（中央学術研究所　平成一〇年二月）二～四頁
「降誕会Q＆A　素朴な疑問あれこれ」『躍進』第三六巻第五号（佼成出版社　平成一〇年三月）一八～二〇頁
「仏教と科学――アビダルマの世界――」『月例講話集』第一八集（大倉精神文化研究所　平成一一年三月）三二～五〇頁
「人の生命・もののいのち」『大倉山講演集』第七集（大倉精神文化研究所　平成一一年三月）一一五～一二八頁
「『釈尊の生涯』再生の夢――『釈尊年表』作成に着手して」『真理と創造』第三九号（佼成出版社　平成一一年一二月）一一八～一二五頁
「有り難う――ゴータマブッダ――」『月例講話集』第二〇集（大倉精神文化研究所　平成一二年七月）九四～一一四頁
「今は父子の義はあるべからず――親鸞――」『月例講話集』第二一集（大倉精神文化研究所　平成一三年七月）一四八～一八九頁
「no problem」『東洋大学校友会報』第二〇九号（東洋大学校友会　平成一三年一一月）三頁
『仏教的ものの見方――あるがままに見る』（一隅会　平成一四年一二月）三五頁（総頁）
「見えてきた『釈尊の生涯』」『真理と創造』第四四号（佼成出版社　平成一六年一一月）七七～八五頁
「初期仏教」「パーリ大蔵経」『菅沼晃博士古稀記念論文集　インド哲学仏教学への誘い』（大東出版社　平成一七年三月）一〇六～一一七、二八三～二八五頁

「僧団の生活と戒律」『大法輪』第七二巻第四号（大法輪閣　平成一二年四月）九〇～九五頁
「怨霊のたたり」『チャンダナ』第二〇二号（中央学術研究所　平成一四年八月）二～四頁
『釈尊は伝統宗教とどのように対決されたか』（一隅会　平成一六年九月）二四頁（総頁）
「仏教教団はどのように形成されたか」『心（日曜講演集）』第二四集（武蔵野大学　平成一七年四月）七五～八九頁
「仏教の信仰と実践」『大法輪』第七二巻第一一号（大法輪閣　平成一七年一一月）八八～九三頁
「仏教における生と死の意味――初期仏教を中心に」『真理と創造』第四五号（中央学術研究所　平成一七年一一月）七六～八五頁
「阿難伝・試稿」『森ゼミ紀要　原始仏教研究』第一三号（東洋大学文学部インド哲学科森ゼミ　平成一七年四月）三三～四八頁
「心で唱えたい仏教の名句・名言」（項目解説）『大法輪』第七四巻第二号（大法輪閣　平成一九年二月）

書評

「水野弘元著『法句経の研究』」『東洋学研究』第一六号（東洋学研究所　昭和五七年三月）七三～七四頁
「峰島旭雄編『比較思想の世界』」『平和と宗教』第六号（庭野平和財団　昭和六二年一二月）一〇七～一一二頁

辞典その他項目執筆

『日本の古典・名著　総解説』（自由国民社　昭和五一年九月）

『空海辞典』（東京堂出版　昭和五四年二月）
『世界の宗教と経典・総解説』（自由国民社　昭和五四年二月）
『仏教経典の世界・総解説』（自由国民社　昭和六〇年三月）
『日本大百科全書』（小学館　平成五九年～平成六年）
『仏教大事典』（小学館　昭和六三年七月）
『仏教文化事典』（佼成出版社　平成一年一〇月）
『岩波　仏教辞典』（岩波書店　平成一年一二月）
『新版　日本思想史文献解題』（角川書店　平成四年三月）

研究室報告

① 本年度をもって森章司教授が退職されることとなった。定年前の依願退職であるということで、「最終講義」あるいは「囲む会」などの実施を辞退されたことは残念であるが、本号の巻頭には先生ご自身の筆になる「私の仏教学」が掲載されている。先生の学究としての、また教育者としての回顧と総括が述べられているので、是非とも御一読頂きたい。

② 恒例となった新入生歓迎行事について、今年度は栃木県足利市の長林寺、足利学校の御協力を得ることができた。長林寺では、御住職の矢島道彦先生による座禅指導と貴重な文化財についての御講義を頂いた。足利学校では研究員の方による懇切な解説を受け、参加者は大いに知的刺激を受けた。御協力を頂いた各位には厚く御礼申し上げます。

③ 今年度のティーチングアシスタントは、出野尚輝君、満達君、林香奈さん、鈴木貫太君の四人体制であった。

④ 卒業論文・制作の提出者は、Ⅰ部が二十二名、Ⅱ部が二十六名であり、大学院の修士論文提出者は七名であった。優秀論文に対する褒賞は以下の通りである。

・田村芳朗奨学基金

学　部　秋田侑士（Ⅰ部）、戸田愛子（Ⅱ部）

・勧学奨学基金

学　部　井原知子（Ⅰ部）、神谷美恵子（Ⅱ部）

・校友会学生研究奨励基金

学　部　佐藤美那海（Ⅰ部）、橋爪浩昭（Ⅱ部）

大学院　鈴木貫太

また、今年度より文学部として優秀卒業論文をCD-ROMに収録して公表することとなり、本学科からは佐藤君、秋田君、戸田さん、橋爪君が選ばれた。

平成十八年度業績（平成十八年一月～十二月）

森　章司

〈論　文〉

「ブッダゴータマとそのサンガ（教団）」（単著、『増谷文雄名著選』解説、佼成出版社、平成十八年二月、六〇三～六二九頁）

「提婆達多（Devadatta）の研究」（共著、『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究（十一）』、中央学術研究所、平成十八年十月、一～一一四頁）

「コーサラ国波斯匿王と仏教―その仏教帰信年を中心に（上）」（単著、『印度哲学仏教学』第二一号（北海道印度哲学仏教学会、平成十九年三月刊行予定）

「サンガのなかの釈尊と弟子―人材育成の理念と特徴―」（単著、『人間と科学』第一四号、中央学術研究所、平成一九年三月刊行予定）

「釈尊のサンガは存在したか―『現前サンガと四方サンガ』序説」（単著、『智山学報』第五六輯、智山勧学会、平成一九年三月刊行予定）

「『現前サンガ』と『四方サンガ』」（単著、『東洋学論叢』第三二号、東洋大学文学部、平成一九年三月刊行予定）

〈その他〉

「心で唱えたい仏教の名句・名言」（項目解説、『大法輪』第七四巻第二号、大法輪閣、平成一九年二月）

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会理事／地域文化学会理事／日本仏教学会／日本宗教学会／仏教思想学会

〈教育活動〉

学内担当科目

学　部　仏教学概論

インド哲学仏教学演習（Ⅰ部Ⅱ部乗り入れ）

アビダルマ哲学（Ⅱ部）

大学院　初期仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導（前期）

仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導（後期）

〈社会活動〉

団体役員等

庭野平和財団評議員／大法輪石原育英会評議員

学術講演／一般講演／講座等

法句経（Dhammapada）（東洋思想への誘い～インド哲学・仏教のエッセンスを原典に探る～、東洋大学公開講座、平成一八年五月二〇日）

坂口安吾とインド哲学～「坂口安吾の文学世界」～（東洋大学公開講座、平成一八年六月二三日）

サンガのなかの釈尊と弟子～人材育成の理念と特長～（第

一八回「人間と科学」研究学会大会、南青山会館、平成一八年一〇月二八日）
仏教の世界観から見る生命倫理（東洋哲学研究所、日本青年館、平成一八年一〇月三〇日）

〈大学・学部の管理・運営〉
教職課程運営委員会委員

竹村牧男

〈著書〉
『禅と唯識――悟りの構造』（単著、大法輪閣、平成十八年三月、二六二頁）
『共生のかたち――「共生学」の構築をめざして』（松尾友矩との共編著、「「共生学」の課題と展望」、一～十八頁、第一章「縁起と共生」、二〇～三九頁、誠信書房、平成一八年五月）

〈論文〉
「鈴木大拙の「自由」論」（『大乗禅』、平成十八年一月、四～十八頁）
「仏教と「共生」を考える」（『大乗禅』平成十八年二月、五四～六八頁）
「縁起と共生――仏教の視点から」（『東洋学論叢』第三一号（東洋大学文学部紀要インド哲学科篇第五九集、平成十八年三月、平成十八年3月、四七～八六頁）
「仏教と倫理の問題を考える　上・下」（『大乗禅』平成十八年四・五月号、平成十八年五・六月、四一～四九、三一～四七頁）
「仏教における絶対者の人格性および非人格性をめぐって」（『東西宗教研究』第五五号、東西宗教交流学会、平成十八年六月、一一八～一三五頁）

〈その他〉
「重々無尽のいのち――『華厳五教章』を読む」（『大法輪』平成十七年八月号より毎月連載）
「華厳思想に学ぶ①　深遠で精緻な華厳の世界」（『在家仏教』平成十八年四月号、平成十八年四月、三十二～四十二頁）
「華厳思想に学ぶ②　善財童子の求道遍歴」（『在家仏教』平成十八年五月号、平成十八年五月、四〇～五七頁）
「華厳思想に学ぶ③　共生への道を尋ねて」（『在家仏教』平成十八年六月号、平成十八年六月、六四～七七頁）
「華厳思想に学ぶ④　重重無尽の縁起」（『在家仏教』平成十八年七月号、平成十八年七月、五〇～六三頁）
「大乗仏教のこころ」（『仏教文化』東京国際仏教塾、第一二〇号、平成十八年四月一日、二～六頁）
「大海の寸心・高峰の大拙――霊性上の真実をめぐって①②③④」（『中外日報』平成十八年六月十七日、二十日、二二日、二七日）

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本印度哲学仏教学会理事／日本宗教学会理事／比較思想学会理事／仏教思想学会理事／東方学会会員

その他

東洋大学学術研究推進センター・特別研究〈「共生学」の構築〉共催学術シンポジウム「アジアの「共生」を考える」で、司会を担当、（一月二八日午後、東洋大学スカイホール）

地球システム・倫理学会　第一回学術大会において、フォーラム2「文明・文化をめぐって」において、司会を担当（二月二十日午後、麗澤大学（千葉県柏市））

ＩＲ３Ｓ第三回ワークショップにおいて、東洋大学の取り組みにつき、プレゼンテーションを行なう（四月十二日、東京大学）

比較思想学会シンポジウム「宗教における信の諸相」において、パネリストとして「宗教における信の諸相――仏教の視座から」を発表、討論に参加（平成十八年六月二四日、鎌倉女子大学）

仏教思想学会学術大会で、午前中三名の司会担当、理事会出席（平成十八年七月一日、駒澤大学）

TIEPh 主催公開シンポジウム「エコ・フィロソフィの構築をめざして」で、パネリストとして「日本思想とエコ・フィロソフィ」を発表、討論に参加（平成十八年十月二一日、東洋大学スカイホール）

ICAS・TIEPh 共催国際セミナー「持続可能な発展と自然、人間――西洋と東洋の対話から新しいエコ・フィロソフィーを求めて」で、「仏教から見た自然と自己」を発表、討論に参加（平成十八年十一月十七日、茨城大学農学部阿見キャンパスこぶし会館２階研修室）

第６回 TIGS-AGS セミナーで、「仏教の自然観」を講演（平成十八年十一月三十日、東京大学本郷キャンパス工学部十四号館二階一四四号室）

東洋大学共生思想研究センター主催公開シンポジウム「共生思想の可能性を探る」で、パネリストとして「仏教思想と共生（中国・日本）」を発表、討論に参加（平成十八年十二月二日、東洋大学）

地球システム・倫理学会第二回大会において、研究発表「草木国土悉皆成仏」の意義について」（平成十八年十二月三日、東洋大学）

第一回龍谷大学東洋大学合同ワークショップにおいて、「共生学の構想について」を発表（平成十八年十二月二二日、龍谷大学深草校舎至心館）

〈教育活動〉

学内担当科目

学　部　日本仏教史Ａ・Ｂ（Ｉ部Ⅱ部）

仏典の思想と文化Ａ

仏教思想論ⅡA・B
インド哲学・仏教学研究法B、
インド哲学仏教学演習
大学院
日本仏教研究
仏教学特殊研究Ⅳ

〈社会活動〉

学術講演／一般講演／講座等

大乗経典の心（恵光寺「生活に活かす仏教」、平成十八年二月二五日、三月二十五日）

仏教と倫理を考える――唯識で説く善の心（在家仏教講演会、平成十八年四月二二日、大手町ビル）

禅と唯識――生死に住せず・涅槃に住せず（朝日カルチャーセンター公開講座、平成十八年五月六日、新宿住友ビル）

私と仏教（青松寺授戒会、平成十八年五月七日、芝愛宕・青松寺）

現代社会と宗教の課題（「仏教と「共生」の問題」、平成十八年五月三一日、増上寺、六月二十日、知恩院）

「共生」への一視点（武蔵大学日曜文化講座、平成十八年七月十六日、武蔵大学）

「華厳の思想Ⅰ」を講義（宗玄会例会、平成十八年一月二七日）

真実信心の風光にふれる――行から信への道を尋ねて（財団法人ジェイアール東海生涯学習財団　講座　歴史の歩き方第三七回、平成十八年十二月十二日、よみうりホール（有楽町））

〈大学・学部の管理・運営〉

大学院仏教学専攻主任／東洋大学共生思想研究センター長／東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブセンター長

宮本久義

〈論文〉

「『マツヤ・プラーナ』所収の「ヴァーラーナスィー・マーハートミヤ」について」、（『東洋大学文学部紀要第五九集インド哲学科篇XXXI』、平成十八年三月三十日）、一～二〇頁）

「ヒンドゥー教における輪廻と解脱」（吉原浩人編『東洋における死の思想』春秋社、平成十八年七月十五日、五～二十五頁）

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本南アジア学会／日本印度学仏教学会／日本佛教学会／建築史学会／早稲田大学東洋哲学会

学会における研究発表

“Research and Studies of Sanskrit Literature in Japan: With Special Reference to Kalidasa.”（International Seminar on Indian Classics in Modern and Post-modern Times: Kalidasa in the West

and East.（国際カーリダーサ学会）, organized by Kalidasa Akademi, India. 平成十八年十一月三日）

〈調査活動〉

「多言語社会における文学の歴史的展開と現在―インド文学を事例として」（平成十七年度科学研究費補助金〔基盤研究（A）〕、研究協力者、研究代表者・水野善文、第三回研究会、平成十八年五月二十日、東京外国語大学本郷サテライト）

「共生思想関連情報の収集」のためインド出張（平成十八年十月三十一日～十一月八日、デリー、ウッジャイン）

「龍谷大学人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センターと東洋大学共生思想研究センター合同ワークショップ及び、知恩院研修」共生思想研究センター（代表者：竹村牧男）平成十八年十二月二十二日～二十三日、京都、龍谷大学及び知恩院）

〈教育活動〉

学内担当科目

学　部　インド古典哲学（バラモン教哲学）（Ⅰ部）
　　インド現代思想（Ⅰ部）
　　インド文化論Ⅱ（Ⅱ部）
　　インド哲学仏教学演習②
　　インド哲学仏教学演習⑪
　　総合講座「仏教と社会」（担当：インド哲学の「環境」観）

大学院　サンスクリット文献研究Ⅰ
　　インド哲学研究指導Ⅰ（前期課程）
　　インド哲学特殊研究Ⅰ
　　インド哲学研究指導Ⅰ（後期課程）

学外担当科目

インド哲学仏教学特殊講義（東京大学文学部、通年）

総合講座「東洋医学の人間科学」中、「古代インドの身体観－ヨーガとアーユルヴェーダ」を担当（早稲田大学人間科学部、平成十八年十一月十日・十七日）

〈社会活動〉

講演

「ヒンドゥー教の死生観に見る輪廻と解脱」、森の夢市民大学、平成十八年九月二十四日（東洋大学エクステンションセンター出張講座として、富山県魚津市）

「ヨーガの誕生と発展の背景」（長野ヨーガ協会、平成十八年七月十五日、長野市飯綱高原アゼリア飯綱）

「１００％信じ、１００％疑う」、坂口安吾誕生百年記念シンポジウム「坂口安吾と現代」のパネリストとして発表（平成十八年十月十一日、井上円了記念ホール）

「『バガヴァッド・ギーター』を読む」（東洋大学エクステンションセンター公開講座「東洋思想のエッセンスを原典に探る」、

平成十八年十月十四日、白山キャンパス一号館）
「インド思想とエコ・フィロソフィ」（東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ第一回シンポジウム「『エコ・フィロソフィ』の構築をめざして」のパネリストとして発表、平成十八年十月二十一日、白山キャンパス・スカイホール）

〈大学・学部の管理・運営〉
東洋学研究所研究員・運営委員／学生生活委員／入試委員／大学院図書館運営委員／共生思想研究センター運営委員

橋本泰元

〈著書〉
『インド中世民衆思想の研究』（単著、ノンブル社、A5判全五八二頁、二〇〇〇六年二月、平成一七年度科学研究費補助金：研究成果公開促進費：課題番号一七五〇〇七交付）

〈翻訳〉
「カビール『ビージャク』和訳余滴（四）―ワサント―」（単著、『東洋学論叢』第三十一号〈東洋大学文学部紀要第五十九集〉平成一七年三月、A5判一五一～一六四頁）
「クリスチャン・ブイ著『ナータ派ヨーガ行者と諸ウパニシャッド』―抄訳（四）―」（単著、『東洋学研究』第四十三号、平成十八年三月、A4判四十五～六十二頁）

〈その他〉
「インド　民のことば」（単著、『東洋文庫ガイドブック2―平凡社東洋文庫編集部編』平凡社、全書判、二百三十八～二四二頁、二〇〇六年五月）

〈学会活動〉
所属学会ならびに役職
日本印度学佛教学会評議員／日本宗教学会／日本南アジア学会／日本佛教学会
研究発表
「インド思想と共生―環境保護運動とヒンドゥー教の言説」（東洋大学共生思想研究センター第一回シンポジウム、平成十八年十二月二日、東洋大学、但しペーパーのみ）

〈調査活動〉
「ヒンドゥー教における共生思想関連の文献・情報蒐集」（平成十八年度東洋大学共生思想研究センター海外短期研究費により、平成十八年九月十七日～九月二十四日インドのヒンドゥー教聖地の調査ならびに在デリー出版社にて関連文献蒐集）

〈教育活動〉
学内担当科目
学　部　インド宗教史（Ⅰ部、Ⅱ部）
インド仏教史（Ⅰ部、渡辺章悟教授国内特別研究のため代講）
インド哲学仏教学演習（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）

ヒンディー文献講読（Ⅰ部）
共通総合科目　総合Ⅵ（A・B）、B、C、F（東洋大学校友会寄附講座、Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ、集中講義、開講責任者）
仏教と社会（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ、春・秋学期各一回担当）
文学部伝統文化講座「聲明公演」（平成十八年六月三日開催に当たり支援）
大学院　インド哲学研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅲ（前期）
インド哲学特殊研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅱ（後期）
学外担当科目
ヒンディー語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ（大正大学学部）
〈社会活動〉
講演「東洋哲学から学ぶ―仏教・ヒンドゥー教に見る―」（埼玉県さいたま市南区六辻公民館介護予防事業「生きがい健康づくり教室」、平成十八年九月二十九日）
〈大学・学部の運営・管理〉
インド哲学科第Ⅰ部主任／文学部内資格審査委員会委員／東洋学研究所所員／東洋大学共生思想研究センター研究員／東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（TIEPh）研究員

渡辺章悟

〈論　文〉
「『大般若波羅蜜多経』における金剛についての研究」（単著、『法華経と大乗経典』望月海淑編、山喜房仏書林、平成十八年、六月、二一五～二三九頁）
「vajra 考（2）（単著、『東洋学論叢』第三十二号）（インド哲学科編『東洋大学文学部紀要』六十集、平成十九年三月）
「vajra 考補遺―Nārāyana の周辺から―」（単著、『智山学報』第五十六輯（福田亮成先生古稀記念論文集）智山勧学会、平成十八年三月）
〈その他〉
「新・『般若心経』入門第一回「『般若心経』は生きている」（単著、『大法輪』八月号、平成十八年八月、三十四～四十一頁）
「新・『般若心経』入門第二回「大乗仏教の興起と般若経」（1）」（単著、『大法輪』九月号、平成十八年九月、一二六～一三三頁）
「新・『般若心経』入門第三回「大乗仏教の興起と般若経」（2）」（単著、『大法輪』十月号、平成十八年十月、一三〇～一三七頁）
「新・『般若心経』入門第四回「『般若心経』のテキストと翻訳」（1）」（単著、『大法輪』十一月号、平成十八年十一月、一二八～一三五頁）
「新・『般若心経』入門第五回「『般若心経』のテキストと翻訳」（2）」（単著、『大法輪』十二月号、平成十八年十二月、一四四～一五一頁）

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会（幹事・常務委員）／日本佛教学会／日本宗教学会／仏教思想学会／日本西蔵学会／北海道印度哲学佛教学会／国際佛教学会（IABS）

学会における研究発表と大会参加

「パネルディスカッション《「維摩経」の思想と文化》をテーマ」にパネリストとして発表（日本印度学仏教学会、第五十七回学術大会、平成十八年九月十三日、大正大学）

「国際シンポジウム「漢訳仏典の言語の様相」(Aspects of the Language of Chinese Buddhist Translations)に参加(創価大国際仏教学高等研究所、平成十八年十一月十一日）

〈調査活動〉

「大乗仏教の起源と実態に関する総合的研究」基盤研究B(2)（平成十八年度科研費による研究）．分担研究課題「般若経を中心とする大乗仏教の起源」＜研究代表者：斉藤明・東京大学＞

「チベット・ポタラ宮所蔵梵本『維摩経』に基づく総合研究」基盤研究B（平成十八年度科研費による研究）における分担研究．分担研究課題「梵文『維摩経』校訂研究」＜研究代表者：高橋尚夫・大正大学＞

「東洋的知に基づく共生思想の研究」基盤研究B（平成十八年度科研費による研究）における分担研究．分担研究課題「」＜研究代表者：竹村牧男・東洋大学＞

「日本における死への準備教育―死の実存的把握をめざして―」平成十八年度学術研究振興資金による研究、分担課題「冥界信仰における死生観」に基づき、生駒山系の十三仏板碑を中心として調査（平成十八年十一月十三～十六日＜研究代表者：高木功夫・東洋大学＞）

〈教育活動〉

学内担当科目

学　部（国内研修のためなし）

大学院　サンスクリット文献研究Ⅱ・仏教学研究指導Ⅲ（前期）

インド哲学特殊研究Ⅲ・インド哲学研究指導Ⅲ（後期）

特殊講義

「般若心経を読む」東洋大学生涯学習センター（公開講座、平成十八年五月二七日）

「大般若転読会」（文学部特別講座「声明講演」にて解説、東洋大学円了記念館、六月三日）

「井上円了が受けたカルチャーショック」（校友会寄附講座、総合科目E、七月十八日）

〈社会活動〉

財団法人仏教伝道協会英訳大蔵経編集委員会委員／同協会仏教聖典編集委員会委員／財団法人東方研究会研究員／東洋大学

「共生思想研究」オープン・リサーチ・センター（ORC）研究員／東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（TIEPh）研究員

学術講演／一般講演／講座等

「大乗佛教論」（東京国際仏教塾、平成十八年五月二十五日、東京大学仏教青年会館）

「心はどこにあるのか」（茨城県立日立北高校、平成十八年七月七日、茨城県日立市川尻町）

「お経を読む」（蕨市立西公民館、ことぶき大学、平成十八年十一月二十八日、埼玉県蕨市錦町）

「共生思想の基礎的研究」（共生思想研究センターの研究例会、平成十八年九月二十九日、東洋大学）

シンポジウムでの発表

「法滅と大乗仏教の興起――般若経の用例から」（財団法人東方学会、第五十一回国際東方学者会議、「大乗仏教、その虚像と実像―経典から論書へ（"Mahāyāna" Buddhism: Its Images Virtual and Real, from Sūtras to Sāstras）」をテーマとするシンポジウムにパネリストとして発表、千代田区一ツ橋日本教育会館、平成十八年五月十九日）

「共生思想の可能性を探る」をテーマとするシンポジウムにて、パネリストとして発表（東洋大学共生思想研究センター主催、平成十八年十二月二日、東洋大学）

会議参加

「IR3S」（大阪大学及び、和歌山県立博物館、平成十八年六月三十日～七月三日）

「（財）仏教伝道協会・英訳大蔵経アメリカ会議」に参加（平成十八年八月一～七日、サンフランシスコ、英訳大蔵経編集委員会委員の一人として参加、バークレー沼田翻訳センター）

「共生をテーマとする他機関との研究交流」（龍谷大学及び知恩院、平成十八年十二月二十二、二十三、共生思想研究センターの一員として参加）

伊吹　敦

〈論文〉

「元曉の著作の成立時期について」（『東洋大学文学部紀要』五九〈インド哲学科篇三一〉、五一～六九頁、平成十八年三月）

「『心王経』の思想と制作者の性格」（日本敦煌学論叢編集委員会『日本敦煌学論叢　第一巻』比較文化研究所、二〇五～二四一頁、平成十八年十月）

「馬祖的思想与時代精神」（楊曾文等編『馬祖道一与中国禅宗文化』三五～四八頁、中国社会科学出版社、平成十八年十一月）

「『二入四行論』の成立について」（『印度学仏教学研究』五十五―一、一二七～一三四頁、平成十八年十二月）

〈その他〉
「正統性の確立　要説・中国禅思想史8」（『禅文化』一九九、四三～五十二頁、平成十八年一月）
「語録の世界（上）要説・中国禅思想史9」（『禅文化』二〇〇、八六～九四頁、平成十八年四月）
「語録の世界（中）要説・中国禅思想史10」（『禅文化』二〇一、一一～一一八頁、平成十八年七月）
「語録の世界（下）要説・中国禅思想史11」（『禅文化』二〇二、一一～一一九頁、平成十八年十月）
「元暁学研究」二、仏国寺元暁学研究院（韓国慶州）二〇〇六年十二月二五～九一頁
〈学会活動〉
所属学会ならびに役職
日本印度学仏教学会／仏教思想学会幹事／早稲田大学東洋哲学会／日本仏教学会／財団法人東方学会
研究発表
「『二入四行論』の成立について」（印度学仏教学会、平成十八年九月一二日、大正大学）
「元暁と『金剛三昧經論』」（国際元暁学会、平成十八年一一月四日、韓国慶州市仏国寺文化会館）
〈教育活動〉
学内担当科目
学　部　中国仏教史ＡＢ（Ⅰ部／Ⅱ部）
仏典の思想と文化ⅡＡ（Ⅱ部）
インド哲学仏教学研究法Ｂ（Ⅱ部）
インド哲学仏教学演習（乗入れ）
インド哲学仏教学演習（Ⅱ部）
大学院　中国仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅳ（前期）
学外担当科目
学　部　東洋哲学選択演習三九（早稲田大学第一文学部）
〈社会活動〉
財団法人東方研究会兼任研究員
講演「中国禅の形成」（鎌倉禅研究会、平成十八年二月九日、建長寺）
〈大学・学部の管理・運営〉
インド哲学科Ⅱ部主任／Ⅱ部主任会議委員／文学部内資格審査委員会委員／文学部内カリキュラム検討委員会委員／東洋学研究所研究員

沼田一郎

〈翻訳〉
「『ガンゴーットリー国縁起譚』第一章和訳」（単著、『東洋学論叢』第三十一号〈東洋大学文学部紀要第五十九集〉平成一七年三月）

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本南アジア学会／日本印度学佛教学会／日本佛教学会／仏教思想学会／北海道印度哲学仏教学会評議員／

研究発表

「ダルマ文献司法主題の名称と内容」（北海道印度哲学仏教学会、平成十八年八月三十日、札幌大谷短期大学

〈調査活動〉

「インドヴァラーナスィーにおける調査研究」（東洋学研究所プロジェクト「東洋思想における個と共同体の探求」（代表者竹村牧男）による、平成十八年九月十～十二日）

〈教育活動〉

学内担当科目

学　部　サンスクリット文献購読（Ⅰ部）

インド哲学仏教学研究法B（Ⅰ・Ⅱ部）

インド文化論Ⅰ

インド古典哲学（Ⅱ部）

インド哲学仏教学演習（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）

仏教と社会（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ、秋学期各一回担当）

学外担当科目

宗教学（高千穂大学）

〈大学・学部の運営・管理〉

文学部選書係／情報機器運営委員／東洋学研究所所員・運営委員／

平成十八年度演習ゼミ活動報告

沼田一郎

インド哲学仏教学演習①（乗り入れ）

①テーマ「インド社会研究の諸問題」

②メンバー　植木雄大（幹事）、田口恵理（副幹事）、他四年生八名、三年生十二名、二年生十二名

③活動報告

本年度は、デュボア著『カーストの民』（平凡社東洋文庫）を輪読した。近代インド社会の様子をイエズス会の宣教師が紹介した文献であり、既知のインド社会についての知識との異同を実感することを目指したものである。担当者は分担箇所をまとめて報告する一方で、関連する問題を自由に深めてレポートする形式をとったが、その程度は一様ではなく、調べるべきポイントを事前に明確にする必要があったと反省している。

これ以外には、それぞれの関心に基づく自由研究を行った。資料の収集やプレゼンテーションの点で不十分な発表もあったが、最近の傾向としてネット上にある出所不明のデータに依拠することが多いようである。これは他の講義においても注意する必要を感じる問題である。卒業論文指導は、秋以降に中間発表を課したが、基本的には個別指導を重視した。

恒例の夏の合宿は、日程の都合で実施できなかったので、これに代わるものとして、日帰りの研究発表会を実施した

宮本久義

インド哲学仏教学演習②（乗り入れ）

①テーマ「インド思想研究」

②メンバー　春学期・北見秀人（幹事）、石川朋子（副幹事）他四年生十六名、三年生十一名、二年生七名／秋学期・富井龍司（幹事）、南浩一（副幹事）、（幹事を除く）四年生十六名（留学中の一名を除く）、三年生十一名、二年生六名

③活動報告

本年度も昨年度同様、サンスクリット原典の講読といくつかの班に分かれての研究発表という二本立てでゼミを行った。原典講読は、インド古典中もっとも有名な典籍であり、ヴェーダーンタ学派の聖典の一つでもある『バガヴァッド・ギーター』の第二章を選び、担当者が文法的解説と和訳を発表する形で行った。担当者の中には一語一語辞典で調べて、それらを無理やり結び付けて訳す者もいたので、すでにある何種類かの和訳を参照するよう指導した。研究発表は、哲学班、神話班、文学班、文化班が順番に研究発表を行い、それについて討論する形で進めた。

夏期の研修合宿は九月七日から二泊三日、白馬セミナーハウスで行った。各班の発表と四年生の卒論中間発表ともに、参加者全員がコメントすることにしたので、時間はかかったが、発表者に

とってはいろいろな意見が聞けたので、充実した時間がもてたと思う。二日目の午後数時間は自由時間とし、長野オリンピックで使用されたジャンプ台や公営温泉場などを訪れて楽しい時を過ごすことができた。

橋本泰元

インド哲学仏教学演習③（乗り入れ）

①テーマ「中世ヒンドゥー教思想研究」

②メンバー　平川敬太（幹事）、若林大介（副幹事）、他Ⅰ部四年生二名、Ⅱ部四年生五名、Ⅰ部3三生九名、Ⅱ部三年生二名、Ⅰ部二年生十五名

③活動報告

今年度も昨年度と同様に、大勢のゼミ生を四班に分けて、自主的研究の発表を一コマの授業に一班の割合で、レジメを用意して発表し質疑応答する形式にした。

思想班Aは、本ゼミの課題であるヒンドゥー教のバクティ（帰依）思想の研究、思想班Bは、古典哲学のうち論理学派の研究、文化班Aは、ヒンドゥー教の民間祭礼の研究、文化班Bは、ヒンドゥー教の女神信仰の研究を行った。

自主的研究の熱心さには各々の班によって違いがあったが、概して各班の中心的メンバーが牽引して発表は良く出来ていたように思う。しかしながら、やはり、学生の自主的研究であるので、参考資料が圧倒的に邦語であったことが反省される。原典や邦文以外の研究書に当たっていた班もあったが、ごく少数の学生のみであった。既知の事柄をまとめて提示するという訓練は出来るだろうが、原典を読み資料を批判的に検討するという、学問の基本的な訓練になかなか取り組めなかったのが猛省される。さらに、質疑応答が学生間で活発でないのが問題である。

この自主的研究の発表と平行して、四年生の卒業論文（卒業制作）の発表も行ったが、多くの四年生は、夏期のゼミ研修合宿で行った。この合宿は、昨年と同じ鴨川セミナーハウスで、九月六日から二泊三日で行った。初日夕食後の班発表、中日正午前後の卒論中間発表と院生の研究発表は充実していたと思う。また、初日夜と中日夜の懇親会では、充分、親睦を深めることが出来た。このほか、今年はゼミ長の企画で、ゼミコンパを多く開くことができ、ゼミ運営の活性化に繋がったと思う。

森　章司

インド哲学仏教学演習⑤（乗り入れ）

①テーマ「原始仏教研究」

②メンバー　前期・橋爪浩昭、後期・田中庸介（幹事）他、四年生四名、三年生三名、二年生五名

③活動報告

例年通り、年度初めの六回は大学院生の協力も得ながら、原始仏教概説、原始仏教資料概説、卒業論文（制作）の書き方、電子資料の使い方などを講義し、図書館見学を行った。その後研究活

動に入った。研究は共同研究と個人研究の二本立てで進めた。

共同研究の今年度のテーマは学生諸君と相談したうえで、「パーリ聖典における attan（ātman）の意味」と設定した。昨年（平成一七年）度の研究「死後・輪廻はあるか」によって、原始仏教は死後・輪廻を認めていることが明らかになったが、原始仏教が「霊魂」あるいはそれに相当する、死後に残り輪廻する主体となる「何ものか」を認めていたのかどうかということは解決せずに残されたので、これを解決するための一つの手がかりを得るためである。この研究の意義と目的は「企画書」に、次の三項目があげられている。

①「無我（an-attan）」のなかの 'attan' が単純に「霊魂」ないしは「輪廻の主体たる何ものか」を意味しているとは考えられない。それではこれはウパニシャッドのいう 'ātman' をさすのか、それとも他の何ものかをさすのか。

②そもそも仏教のいう「無我」が何を意味するのか、ここに含まれる「我」が何をさすのか明らかではない。

③従来 'attan' は 'an-attan' を通して研究される傾向にあった。本研究はパーリ聖典における attan（ātman）をじかに調査して、仏教の 'attan' がどのようなものを意味しているのかを探り、従来の 'an-attan' 研究に風穴を開けることを期待する。

そこでまず、*Dhammapada* に用いられている 'attan' の全使用例を森が調査したうえで資料として提示して（五一偈に使われている）、学生諸君にその意味を考えてもらった。次に釈尊当時のインドで行われていた諸思想の中で 'attan' がどのように用いられているかということを調査するために、*DN.1 Brahmajāla-sutta*「梵網経」を読んでもらい、そこに使われている 'attan' の意味を考えてもらった。しかしこれは学生諸君にとっては難しい作業であったようであり、十分に理解するところまではいかなかった。

そこで今度は森の気がつく範囲での原始仏教聖典の中に使われている 'attan' の用例を提示して、その意味を考えてもらった。その用例は「無常・苦・無我」説の導入部に使われる 'attan' や、宝石を取って逃げた遊女を探すより 'attan' を探せ、'attan' を島とし 'attan' を拠り所とせよ、八正道を起こすときに先駆となり前相となる我具足（attasampadā）などである。そして最後に SN.24 *Diṭṭhi-saṃyutta*（相応部・見相応）に使われている 'attan' と大乗『涅槃経』に現れる「我」が何を意味するかを考えてもらった。

上記研究の結果については、『森ゼミ紀要』第一五号に掲載する学生諸君の報告書と、筆者が書いた「目的・資料と若干のまとめ」を参照していただければ幸いである。もちろんはっきりした結論が出たわけではないが、学生諸君はこれを通して少なくとも問題が奈辺にあるのかくらいはしっかりと把握できたはずである。

個人研究は四年生の卒業論文（制作）テーマに関する研究、三年生以下は卒業論文（制作）を視野に入れた自由研究とした。原則として月の第一週はこの指導にあて、その発表は九月二二日から二四日までの二泊三日のゼミ合宿（鴨川セミナーハウス）にお

いて行った。合宿にはゼミに出席している大学院生はもちろん、四名の卒業生も参加してくれ、充実した合宿となった。その結果、今年度の卒業論文の提出者は四年生全員の五名と、修士論文の提出者は大学院前期課程二年に在学する大学院生全員の三名となり、一人の落後者も作らずにすんだ。個人研究のうち卒業論文（制作）についてはその要旨を、優秀論文（今年度は紀要の編集作業の方が卒業論文口述試験よりも先になったため、学科が決定した優秀論文ではない）についてはその全文を『ゼミ紀要』に掲載する。

ゼミのホームページ（http://www2.toyo.ac.jp/~morimori/）へのアクセスは、この1年間で約三、二〇〇件であった。開設以来の総件数は一五、三八〇件である。

なお本ゼミは、筆者がこの三月末日をもって退職するために、新任の岩井昌悟講師に研究テーマや、在学生の論文指導、ホームページ、その他の一切を引き継いでもらうことになっている。現在のゼミ生諸君には一月一八日のゼミ最終日に岩井講師を紹介し、引き続いてコンパを行った。より充実した「原始仏教研究ゼミ」になるものと期待している。

伊吹　敦

インド哲学仏教学演習⑥（乗り入れ）

①テーマ「禅思想史研究」

②メンバー　大西政嗣（幹事）他、四年生一〇名、三年生三名、二年生二名

本ゼミは、中国仏教の中でも、最も中国的な性格を多分に持つ「禅」を中心に、その思想の特質や成立、変化をたどってゆくことを目的とするものである。

学生との話し合いの結果、本年度は、学術文庫本『道元禅師語録』を講読した。テキストには訳文が付されているものの、通常の言葉では表現しがたい「悟り」を主題とするだけに、理解は容易ではなく、進捗状況は必ずしもよくはなかった。しかし、慌だしい現代に生きる学生にとって、短いテキストの意味をじっくりと考えるという経験は稀であり、それなりの意味があったと考えている。

授業の運営は、テキストをいくつかに分割して、それぞれを二三人に担当させ、各人にレジュメを作製してきてもらい、担当者を中心に全体で討議するという方法を取った。この方法は色々な点で非常に有効であるので、次年次以降も継続して行きたいと考えている。担当者の熱意にかなりの差があるということは、ある程度止むを得ないことであるにしても、自発的な発言が必ずしも多くないという点については、まだ改善の余地が残されているように思われる。

なお、ゼミ活動のもう一つの柱である卒論指導については、授業中での研究成果の発表はなるべく行わず、研究室での個別指導で対応しようと努めた。授業時間内での卒論指導には余りに制約が多いし、そちらに時間を裂かれてテキストの読解が進まなくな

ることを恐れたためである。この方法は熱心な学生には非常に有効であった反面、ほとんど指導を受けようとせず、しかも粗忽な論文を提出したものがいたという現実もあり、この点でも改善の余地があるように思う。

課外活動としては、一年を通して飲み会を何回か行い、また、夏季休暇中には鬼怒川温泉に宿泊する小旅行を行ない、ハイキングを行うなどして楽しい時間を過ごした。ただ、参加者がいつも一部の学生に限られたのは遺憾であった。

竹村牧男

インド哲学仏教学演習⑦（乗り入れ）

①テーマ「日本仏教の古典とその思想」

②メンバー　伊東瑠璃（幹事）、亀谷法世（副幹事）他、四年生五名、三年生十七名、二年生八名

③活動報告

本年度から、新たなテーマを掲げて、ゼミ活動を展開した。世に日本仏教の名著と言われるような書物をめいめい自由にとりあげて、その書物が当時と現代とにどのような意味をもっているのか、尋ねてもらうことをねらいとしたが、書物全体をとりあげることがむずかしく、結局、祖師方の思想の一端を学ぶにとどまった感がある。春学期は、調査が不十分なのも仕方ないが、秋学期の発表においても、それまでの時間が十分にあったはずにもかかわらず、おざなりの発表が続いたことは、残念であった。来年度もひきつづきこのテーマで行うことにしており、めいめいがさらに深く掘り下げていくことを期待したい。

なお、発表を聞いてのちのディスカッションにも意欲が見られず、ただ発表を聞くのみでよいと考える姿勢が多く見られたのも、残念なことである。

夏休みには、山中湖畔のゼミナーハウスにおいて合宿を行なったが、勉強の時間以外を個人の自由活動にあてたことから、共同のレクリエーションが花火と飲み会くらいしかなく、帰属意識の涵養という点では不足もあったかもしれない。今後、みんなで登山をするとか、みんなで同じスポーツをするとかの活動も必要に思った。

もちろん、新入生歓迎や忘年会等のコンパも行った。

反省点ばかりあげたが、意欲の見られる学生も少なくないので、来年度にはさらなる活性化を実現していきたい。

島田茂樹

インド哲学仏教学演習⑧（乗り入れ）

①テーマ「インド仏教文献講読」

②メンバー　石川友由香利（前期幹事）、相川裕保（後期幹事）他、四年生五名、三年生十名、二年生十名、聴講生一名。

③活動報告

本年度は仏教文献（原典）の講読を通して、全ての研究の基礎資料であるテキストの読み方とその解釈の方法を学ぶこと、また

サンスクリット語の復習も兼ねることを目的とした。ゼミ生の研究対象を考慮し、仏教経典（『孔雀明王経』・初期密教経典とはいえ、その内容はジャータカ的構成を有し、更に当時のインドの文化等を知る上での百科全書的様相も呈している）、図像学・美術関連の儀軌（『Ni_pannayog_val』・二十六種類の曼荼羅の観想法―描き方を説く）の二つの文献を（一授業に一文献）、予め分担を決められた二人が、レジュメを作成・配布し、ローマナイズ、文法、翻訳を発表し、それに対して全員で質疑応答、最後に教員が補足、並びに関連事項を解説していく方式を取った。担当者が1人も休むことなく、積極的に発表できたことは称賛に値するが、ただそれ以外の予習者が少なかったことは反省に値する。更に各月末の講義日のみは、四年生の卒論の昼間発表に当て、四年生には完成への重要な助言となり、三年生以下の学生たちには今後の貴重な体験となった。

九月九日から二泊三日で、日光を中心に夏期合宿を行った。世界遺産指定の仏教美術見学などフィールドワークが中心で、なによりも教員と学生、学生と学生との親睦が深まったことは、ゼミ合宿の一つの目標は十分に達成できただろう。

最後に、語学を重視し、「ゆっくりと丁寧に読む」が前提だったので、なかなか思想的、文献解釈学的段階までに至らなかったのは残念であるが、ゼミ生達が厳密な原典研究の必要性を、そして、まずはその楽しさを実感できたならば、教員にも学生たちにも及第点を付けてもよいだろう。

伊吹　敦

インド哲学仏教学演習⑨（Ⅱ部）

①テーマ「仏教思想研究」

②メンバー　島田奈津希（幹事）他、二年生一二名、三年生一名

本ゼミは、一学年で「インド哲学仏教学研究法」を受講した二年生に対して、仏教に対する理解を更に深めてもらうことを目的とするものである。その目的を達成するためには、直接、テキストに触れてもらうことが重要であると考え、毎週、仏教史上における最も代表的なテキスト一つをテーマとして取り上げ、各自、輪番で調べて発表してもらうこととした。そして、発表に当たっては、単にその文献について調べるだけでなく、最も重要な箇所を紹介し、解説することを義務として課した。

「仏教」と一言で言っても、その範囲は極めて広いが、本ゼミでは、我々が日本人であり、日本の仏教がインド・中国の仏教を継承するものであることを考慮に入れて、インド・中国・日本三国に亘って、最も重要と思われるもの、二十数編をテーマとして選んだ。本人の希望を聞いたうえで担当するテキストを決めたので、中には極めて熱心に調べ上げ、優れた発表をするものがいた反面、ほとんどメモのようなレジュメで発表するものもいて、内容のバラツキが著しかった。また、発表者に対して自発的な質問を投げかける人が極めて少なかったことも今後の課題と言える。しかし、取り上げたテキストの難しさを思えば、皆、それなりに頑張ったのではないかと思う。

夏休みに合宿に行くことを計画していたが、教員の身内の不幸のために実施することができなかった。来年度はなんとか実施できたらと思う。その他の課外活動としては、出野ゼミと合同でゼミコンパを行い、楽しい時間を過ごすことができたことは、楽しい思い出である。

出野尚紀

インド哲学仏教学演習⑩（Ⅱ部）

①テーマ　「インド文化を味わう」

②メンバー　上野絢子（幹事）他、第2部三年生二名、第2部二年生十四名。

③活動報告

このゼミは、第Ⅱ部二年次必修二ゼミの一つであり、インド学分野に興味がある学生を対象としている。

テーマを「インド文化を味わう」としていることもあり、学年初めの四回に出野がインドの美的鑑賞理論であるラサ論の概略を行い、続けてサンスクリット語文学の大まかな流れについて講義を行った。第五回目の授業時間以降、『ナラ王物語』第一章の輪読を行った。発表方法は、発表しない学生も自らの手を動かすことにより理解度を高めることを目的として、プリント配布ではなく、OHCによる投射もしくは板書によることとした。一回の授業時間に二人ずつ発表を行い、適宜出野が解説を加えた。担当はなるべく学生の自発的な希望により決定するようにした。そのため、年間一度も発表しない学生から最大四回発表する学生までの差が出たことは反省点である。また、『ナラ王物語』の読解に留まることは宜しからざると考え、春学期・秋学期一度ずつ幾つかの選択肢から一つ興味があることを選ぶ形式でレポートを課した。

九月二十七日より二十九日まで二泊三日の日程で、山中湖セミナーハウスにてゼミ合宿を行った。直前の病欠者がいたため、参加者が六名と少なかったが、『シュリンガーラシャタカ』の読解を行い、インド恋愛詩の風情を味わった。

五月十五日と十二月十八日の二度コンパを行った。特に十二月十八日の二度目のコンパは、伊吹敦先生担当の仏教学分野の二年次ゼミと合同で行い、仏教に興味がある学生との交流も深められたので良かったと思う。

（二〇〇七年一月十五日、ゼミ生と共同執筆）

宮本久義

インド哲学仏教学演習⑪（Ⅱ部）

①テーマ「インド思想研究」

②メンバー

幹事：竹田学（幹事）、狩野久枝（副幹事）他、三年生五名

③活動報告

本年度から卒論を書く予定の2部の三、四年生のために開かれたゼミである。それゆえ本年度は三年生のみ七名という小所帯であった。授業の前半は叙事詩『ラーマーヤナ』の講読、後半は各

自の発表という形で進めた。各自の発表は班発表と違い、自分で責任を持って題材を決め、参考文献を探し、プレゼンテーションをするということなので、たいへん力がついたと思う。四、五月には十分か十五分で終わっていた発表が、秋学期の途中以降は発表も質問も活発になり、サンスクリット文献の講読もしばらく中止するほどになった。

夏期の研修合宿は九月十七日から二泊三日、富士見高原セミナーハウスで行った。もともと人数が少ないので岩井ゼミに呼びかけて合同という形になった。三年生ではあるが、卒論のテーマと内容の発表をしてもらった。発表者に対して、参加者一人一人が今後どのように卒論をまとめていくか提言する形でコメントした。このことが秋学期からの授業において、発表とそれに対する討論が活発になった理由だと思う。二日目の午後は電車で諏訪神社を訪れ、楽しい時を過ごすことができた。次年度は新たな三年生を迎え、講読と研究発表ともにさらに充実したものになるよう指導していきたいと思う。

岩井昌悟

インド哲学仏教学演習⑫

①テーマ：仏伝の研究

②メンバー　天野まゆこ（幹事）他、三年生八名

③活動報告

年度のはじめにゼミ生と相談した折に、年間を通して一つの統一テーマがあった方が望ましいという意見、中には梵・巴の原典講読に挑戦したいという要望もあった。そこで今年度については三年生のみを対象とすることもあり、具体的な卒論指導よりもゼミ生の基礎学力の向上に重きをおいて、原典の輪読を主として進めた。統一テーマは「仏伝」とし、しかしある特定の仏伝文学の文献に絞るのではなく、釈尊のある特定の事績に焦点をあて、それに文献によってどのようなヴァリエーションがあり、その細部の変化によって文脈全体にどのような違いが生じるかを検討しようと試みた。ある特定の事績として本年は、ヴェーサーリーで疫病による災害が生じた際に釈尊が王舎城からヴェーサーリーに赴く事績を選んだ。これは仏伝文学の文献では『マハーヴァストゥ』に記述がある他、『ダンマパダ註』や『増一阿含経』、『根本有部律薬事』などにも伝わっている。

春学期は四月に仏伝文学の概観などについて担当者が講義形式で解説を行った後、5月より実際の講読に入り、『ダンマパダ註』「ガンガーローハナ・ヴァットゥ」のパーリ語原典とその英訳とを並行して輪読した。これはパーリ語に挑戦したいというゼミ生と英訳読解のみで参加したいというゼミ生とに分かれて予習してもらった。秋学期は、はじめに『ダンマパダ註』の春学期中に読みきれなった分を担当者が解説によって補ってから、全員で『除恐災患経』の原漢文による輪読に入った。目標としたことはほとんど達成できず、『ダンマパダ註』も『除恐災患経』も読み通すことができなかったため、ゼミ生自身に伝承の差異に着眼してそ

れについて考察してもらうことはできなかった。これは担当者としても反省すべき点であるが、伝説中の釈尊の人物描写などについてゼミ生から活発な意見を聞くことができた。

また卒論を視野に入れた自由課題による個人研究の発表の時間を設けた。夏休み中、九月十七日から十九日の二泊三日の日程で、親睦と個人研究発表を主なる目的として、富士見高原セミナーハウスにおいて、宮本ゼミとの合同合宿を行った。研究発表の際にはひとりひとりの発表に対し、全員がなにかしらの意見や感想などを発言することを約束してもらい、これには活発な発言がみられ、大変有意義であった。合宿に欠席したゼミ生は秋学期に入ってから十月五日、十月十二日、十二月七日に発表を行った。また1月十一日と1月十八日に今年度二回目の発表の時間を設けた。個人研究の発表については、未だテーマが絞られていないために問題の所在がはっきりしない、他人の著書やインターネットから得た情報の丸写しや引用のみのものがあるなどの問題が見受けられた。これは指導の対象となったが、ゼミ生の今後の進展に期待したい。

平成十八年度開講科目

・従前の通年科目は一～三年生対象の場合A（春）・B（秋）に分かれるが、担当者が同一の場合はその区別は省略して記した。
・授業名の後のカッコ内は、サブタイトルを示す。
・担当者に付したカッコ内の数字は、それぞれⅠ部・Ⅱ部の区別を示す。カッコが付されていないものは、Ⅰ部Ⅱ部乗り入れ科目か、Ⅰ部・Ⅱ部の担当者が同一であることを示す。

〈学部〉

インド宗教史（インド世界の思想の流れを見る）　橋本泰元
仏教学概論（仏教とは何か）　森　章司
インド仏教史　橋本泰元（Ⅰ）
インド仏教史　石上和敬（Ⅱ）
中国仏教史　伊吹　敦
日本仏教史　竹村牧男
朝鮮仏教史（朝鮮（韓国）仏教に対する理解を深める）　佐藤　厚
東南アジア仏教史　藪内聡子
サンスクリット文献講読　沼田一郎（Ⅰ）
サンスクリット文献講読（古典サンスクリット初級文法）　渡邉郁子（Ⅱ）
インド哲学仏教学研究法A（インド哲学仏教学への誘い—インド分野から—）　沼田一郎
インド哲学仏教学研究法A（インド哲学・仏教を学問として学ぶとはどういうことか）　竹村牧男（Ⅰ）
インド哲学仏教学研究法B（仏教をいかに学ぶか）　伊吹　敦（Ⅱ）
インド古典哲学　宮本久義（Ⅰ）
インド古典哲学　沼田一郎（Ⅱ）
仏教古典哲学　佐古年穂（Ⅰ）
アビダルマ哲学（仏教教理を探求する）　森　章司（Ⅱ）
インド文学（ヴィンディヤ山脈の頂からインド文学を見る）　高橋孝信
インド・仏教図像学（インド・チベット密教図像学入門）　島田茂樹
日本思想（外来思想の受容と変容）　三澤勝己
東洋思想　島田茂樹（Ⅱ）
哲学概論（知の目的～西洋哲学と仏教～）　渡邉郁子（Ⅱ）
宗教学概論　渡辺浩希
宗教社会学（近現代宗教への社会学的接近／ライフヒストリーの宗教社会学）　川又俊則
イスラム教概説（イスラームのとらえ方）　後藤　明
キリスト教概説（キリスト教の誕生）　山中利美
仏教漢文講読　橘川智昭

チベット文献講読　計良隆世
外国語文献講読　岩井昌悟
ヒンディー文献講読　橋本泰元
パーリ文献講読　石上和敬
仏教梵語講読　岩井昌悟
インド文化論Ⅰ（ヴェーダ祭式から世俗の法規へ）　沼田一郎
インド文化論Ⅱ（道をめぐるインドの歴史と文化）　宮本久義
仏教思想論Ⅰ　金子芳夫
仏教思想論Ⅱ（唯識思想の研究）　竹村牧男
インド現代思想　宮本久義
ヨーガとその思想（ヨーガの実習を交えて）　番場裕之
仏典の思想と文化ⅠA（華厳経の思想と文化）　竹村牧男
仏典の思想と文化ⅠB（密教の思想と文化）　金本拓士
仏典の思想と文化ⅡA（禅の思想）　伊吹　敦
仏典の思想と文化ⅡB（『歎異抄』を読む）　本多静芳
仏教と社会（専任教員と外部講師のリレー連続講義）　竹村牧男
インド哲学仏教学演習①（インド社会研究の諸問題）　沼田一郎
インド哲学仏教学演習②（インド思想研究）　宮本久義
インド哲学仏教学演習③（中世ヒンドゥー教思想研究）　橋本泰元
インド哲学仏教学演習⑤（原始仏教研究）　森　章司
インド哲学仏教学演習⑥（禅思想研究）　伊吹　敦
インド哲学仏教学演習⑦（日本仏教の古典とその思想）　竹村牧男
インド哲学仏教学演習⑧（インド仏教文献講読）　島田茂樹
インド哲学仏教学演習⑨（仏教思想研究）　伊吹　敦
インド哲学仏教学演習⑩（インド文化を味わう）　出野尚紀
インド哲学仏教学演習⑪（インド思想研究）　宮本久義
インド哲学仏教学演習⑫（仏伝の研究）　岩井昌悟
卒業論文・制作

〈大学院〉

博士前期課程

サンスクリット文献研究Ⅰ・インド哲学研究指導Ⅰ（インド哲学大系の研究）　宮本久義
インド哲学研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅲ（中世インド思想の研究）　橋本泰元
初期仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ（律蔵による釈尊教団形成過程の研究）　森　章司
初期仏教研究Ⅱ（アビダルマ仏教研究）　佐古年穂
大乗仏教研究Ⅲ（大乗仏説・非仏説論研究）　齋藤　明
中国仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅳ（中国仏教研究）　伊吹　敦
日本仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ（『華厳五教章』「所詮差別」章講読）　竹村牧男
インド哲学研究指導Ⅱ（般若経文献における智慧の研究）　渡辺章悟

博士後期課程

インド哲学特殊研究Ⅰ・インド哲学研究指導Ⅰ（正統バラモン系統の思想研究）　宮本久義

インド哲学特殊研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅱ（中世インド思想の研究）　橋本泰元

インド哲学特殊研究Ⅲ（大乗仏教の起源）　渡辺章悟

仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ（律蔵の比較研究）　森　章司

仏教学特殊研究Ⅲ・仏教学研究指導Ⅳ（中国仏教研究）　伊吹　敦

仏教学特殊研究Ⅳ・仏教学研究指導Ⅲ（日本唯識思想研究）　竹村牧男

平成十八年度卒業論文

〈Ⅰ部〉

佐藤　那海　黒天変遷の研究

志茂　田玲　本人の死生観――その系譜と高校生の死生観――

麻原さと子　弁中辺論に於ける虚妄分別の存在

大友　祐希　二つのカテゴリー論――『勝宗十句義論』とアリストテレスの『カテゴリー論』――

池田明日香　JAN GONDA の『VEDIC LITERATURE』の和訳

秋田　侑士　ヒンドゥー教徒の一生　入門式及び学生期の考察

山内　飛鳥　ミティラー画と女性～ミティラー画に籠められた祈り～

山岸　祐太　道元の思想と現代における意義

小池　一慶　日蓮における五綱と法華経との関係

加藤ゆかり　インド映画で探る、インド人のメンタリティ

松木　皓平　元政上人と竹――清貧僧の人物像――

樋口　千春　Banergee,p., The Life of Krishna in Indian Art 第４章 Uttar Pradesh の翻訳

町田奈緒美　ヒンドゥスターニ音楽における旋律の発展とラーガ

井原　知子　初期ニヤーヤ学派におけるプラマーナについて

藤野　優友　翻　訳『Patterns of Dacoity in India : a case study of Madhya Pradesh』

伊藤　慶　ヴェーダ聖典に見る「死後」と「死」
江花　亜樹　栄西の研究
中田久美子　カウンターカルチャーにおける東洋思想の影響
大谷　多聞　道元の「現成公案」
遠藤　美鈴　近代インド――広告から見えるニュー・リッチの豊かさと悩み――
ウリジジリガラ　モンゴル語訳『金光明経』の研究
向澤　郁子　仏教美術における摩利支天の研究――『Niṣpannayogāvalī』17 Mārīcī Maṇḍala の全訳とともに――

〈Ⅱ部〉

相澤　努武　浅原才市詩の研究――その作為性と不確実性――
板野　義弘　『Niṣpannayogāvalī』第二章「略集次第所説の阿閦マンダラ」和訳と一考
戸田　愛子　『Bodhicaryāvatāra』禅定章にて考察された自己と他者の関係について
神田真一郎　日本での宗教理解への批判　イスラーム原理主義を中心に
奥村　公一　延命十句観音経霊験記にみる白隠禅師の観音観
小林　昌史　ターミナル・ケアにみる医療における仏教の役割
藤田　千加　宗教美術における文字
齋藤　直樹　南伝大蔵経における鬼類の資料集
神谷美恵子　チベット仏教の周縁――シッキムのレプチャ族の場合――
橋爪　浩昭　輪廻する「我」と解脱する「我」――阿含経の説く死後の世界を考察して――
西畠　一也　原始仏教聖典に於けるラーフラの資料集
石川友香里　ジャワ島とチャンディ・ボロブドゥール
鶴岡美津子　古ウパニシャッドにおける直感とは何か～その考察と検証～
北村　啓悟　『金剛経の禅』にみる鈴木大拙の「即非」の考察
本田　有理　極楽論
加藤　聡美　思想としての死における生物についての考察
田口　陽介　ODDIE.G.A(ed.) Religion in South Asia の序章及び 2. Dele.Stephen.F "Conversion to Islam in Kerala" の翻訳
日川　里子　J・クリシュナムルティの星の教団解散について
川村　知弘　スピノザに於ける〈実体〉と唯識思想における〈実性〉の比較、及びそれによる小考察
坂田　康雄　死を選択する生き方
宮下　研介　大乗仏教の多様性と豊かさに関する初歩的理解　Paul Williams 著 Mahāyāna Buddhism : The doctrinal foundations (Routledge, London, 1989) より、Chapter1 'Introduction' の翻訳
笹澤　一樹　天才数学者シュリニヴァーサ・ラマヌジャンについて
大西　政嗣　道元の経典観

黒澤　優介　ナーガールジュナの縁起について
丸杉　伊作　親鸞における念佛観――『歎異抄』における一考察――

〈大学院〉

博士前期課程

サンスクリット文献研究Ⅰ・インド哲学研究指導Ⅰ（インド哲学大系の研究）　宮本久義
インド哲学研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅲ（中世インド思想の研究）　橋本泰元
初期仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ（律蔵による釈尊教団形成過程の研究）　森　章司
初期仏教研究Ⅱ（アビダルマ仏教研究）　佐古年穂
大乗仏教研究Ⅲ（大乗仏説・非仏説論研究）　齋藤　明
中国仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅳ（中国仏教研究）　伊吹　敦
日本仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ（『華厳五教章』「所詮差別」章講読）　竹村牧男
インド哲学研究指導Ⅱ（般若経文献における智慧の研究）　渡辺章悟

博士後期課程

インド哲学特殊研究Ⅰ・インド哲学研究指導Ⅰ（正統バラモン系統の思想研究）　宮本久義
インド哲学特殊研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅱ（中世インド思想の研究）　橋本泰元
インド哲学特殊研究Ⅲ（大乗仏教の起源）　渡辺章悟
仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ（律蔵の比較研究）　森　章司
仏教学特殊研究Ⅲ・仏教学研究指導Ⅳ（中国仏教研究）　伊吹　敦
仏教学特殊研究Ⅳ・仏教学研究指導Ⅲ（日本唯識思想研究）　竹村牧男

大学院修士論文

畑尾麻由美　B.R. アンベートカルの不可触民観
張　益碩　親鸞『教行信証』「行巻」の研究
鈴木　貫太　明恵上人の華厳思想～初期著作を中心として～
テイラワット　パーリ仏教における仏になる道――十波羅蜜を中心として――
栗原　正和　捨身供養について――捨身供養及び捨身供養に相当する布施を通しての布施の変遷――
岡本さゆり　インド思想における行為についての考察――ヨーガを中心にして――
プラスネット　初期仏教教団における阿蘭若行者（araññaka）に関する研究――『Vinaya piṭaka, Theragāthā Therīgāthā』を中心として――

東洋学論叢　第32号
（東洋大学文学部紀要　インド哲学科篇　第60集）
平成十九年三月三十日　印刷
平成十九年三月三十日　発行
［非売品］
発行所　東洋大学文学部
東京都文京区白山五―二八―二〇
電話　インド哲学科〇三（三九四五）七三五七
印刷　音羽印刷株式会社
東京都新宿区山吹町十五番地
電話　〇三―三二六八―一四四〇

BULLETIN OF ORIENTOLOGY

Bulletin of the Faculty of Letters
Toyo University
NO. 60
Narch, 2007
Series of
INDIAN PHILOSOPHY
XXXII

CONTENTS

MORI, Shoji : A Study of the Biography of Sakya-muni and my Studies of Buddhism ; in going into Retirement ····· (21)

TAKEMURA, Makio : Shinran's Understanding of *Karma-Vijñāna* as True Thought ····· (35)

WATANABE, Shogo : A Consideration of *Vajra* (2) ····· (92)

MORI, Shoji : 'Sammukhībhūta Samgha' and 'Cātuddisa Saṃgha' ····· (114)

MIYAMOTO, Hisayoshi : A Japanese Translation and Notes of The Vārāṇasī-māhātmya in *Matsyapurāgṇa* ····· (135)

HASHIMOTO, Taigen : An Introductory Study of the Gorakhnath's *Bānī* Based on the Pītāṃbaradatta Baṛthvāla's Edition ····· (159)

NUMATA, Ichiro : Names and Contents of the *vyavahārapadas* in Dharmaśāstras —svāmi-pāla-vivāda— ····· (178)

IBUKI, Atsushi : Who is the Auther of the Treatise on the Two Entrances and Four Practices? ····· (185)

Published by
TOYO UNIVERSITY
Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo